

比叡山焼き討ち

元亀二年（一五七二）九月一二日、信長の軍勢は坂本に上陸。延暦寺に対する攻撃を開始します。「叡山焼き討ち」です。ここに至る経緯を見てみましょう。元亀元年（一五七〇）姉川合戦で織田信長は浅井・朝倉連合軍に一応の勝利を納めますが、その勢力を完全に押さえることはできませんでした。事実、そのわずか三ヶ月後には浅井・朝倉連合軍は湖西から南進し、比叡山中に籠もり、信長に対して優位に戦います。この時、信長は、延暦寺に対して協力を要請しますが、黙殺され、仕方



無動寺谷

なく正親町天皇等の斡旋により一応停戦を実現させます。一般には、この時の延暦寺の対応に対する仕返しのため焼き討ちを行ったとされます。

ただ、当時の延暦寺は宗教上の勢力のみならず、近江、美濃に広大な荘園を持つ荘園領主でもあり、これを排除することが信長の領国支配上不可欠であったことは事実です。この焼き討ちに関して、どの程度の戦闘が行われたのかに關しても不明の部分が多くあります。『信長公記』には、「九月十二日、叡山を取り詰め、山下の男女老若、……かちはだしにて、八王子山に逃げ上り、社内に逃げ籠もる……」とあります。信長軍の攻撃は、坂本の里坊に対して集中して行われ、ここに住んでいた人達を、八王子山や、日吉神社の境内に追い込んだ様子がここからは読みとれます。ただ、延暦寺の象徴でもある根本中堂を始めとする主要な堂舎はこの時に焼かれたことは間違い有りません。

しかし、これまでに、部分的に行わ



日吉神社の神体山「八王子山」

れた、延暦寺境内での発掘調査では、境内から大規模な火災の痕跡は見つからず、一六世紀後半の建物の跡もそれほど多くは見つかっていません。

信長の攻撃により、延暦寺が大きな痛手を受けたことは事実でしょうが、全山を焼き尽くすような戦闘が行われたかどうかに関しては、発掘調査による客観的な事実を積み重ねて判断してゆく必要があります。

謎の遺跡 ダンダ坊遺跡

琵琶湖の西岸に連なる比良連峰は、平安時代中期以降、天台宗の勢力の拡大とともに、天台僧の修行の場となり、多くの寺院が山中に営まれました。この様子を江戸時代には「比叡山三千坊、比良山七百坊」（淡海温故録）と表現しています。

ダンダ坊遺跡は、比良川がY字形に支流を集める出会橋の北側、出会小屋の背後に幅約一五〇m、奥行き約五五〇



屋敷の虎口

mの広大な範囲で広がる、比良山中最大の遺跡です。遺跡は、寺院跡、坊跡、館跡など大きく四つのブロックに分かれます。このうち、ここで紹介するのは、館部分にある庭園の遺構です。館跡は、要所に石垣を用い、その入口には枳形虎口が配されます。虎口より入ると広い平地地があり、その北奥に庭園の遺構が遺ります。

庭園はほぼ完全な形で残っており、北西奥に築山を築き、ここに三尊石風の景石を置き、裾から滝を落とします。滝の流れは、麓の小島を浮かべた池に至り、ここから下の屋敷地へ流れ出ます。現在池に水はありませんが、往時は流水の庭であったと想像されます。

この庭は、中世末の典型的な武家の庭の様式を示しています。この時代の庭は、鑑賞のためのものではなく、式三献と呼ばれる、武家の主従関係を確認する儀礼の場の舞台装置として造られました。この遺跡の場合にも、庭の前面には儀礼を行うための主殿が建てられていたと考えられます。



庭園遺構

ダンダ坊遺跡を始めとする比良の寺院は、元亀争乱に際し、延暦寺と共に信長に破壊されたとされています。権力のシンボルとしての庭も当然破壊されるはずなのですが、この庭はほぼ完全に残っています。或いは、庭園の残る館跡は、信長の西近江攻略に際し、在地勢力との服属儀礼の場として、信長方により急速整備され、放置されたものと考えられることができるかもしれません。何れにしても、今後の詳細な調査が待たれる、謎に満ちた遺跡です。